

## 特別展・企画展を考える



ここ数年、産業活性化を  
 合い言葉に各種イベントが  
 数多く開催された。まさに  
 イベントブームである。名  
 古屋で開催されたインポ  
 ート博あるいは名古屋城博な  
 ど、予想以上の人を集め、  
 成功した企画として考えら  
 れている。

このようなイベントは今後も続々と計画され  
 ている。県内でも同様であるが、今一度考えて  
 みる必要がある。打ち上げ花火では困る。見た  
 り参加した人々の心に影響を与えるものがない  
 と価値は半減するのではないか。

同じような疑問が博物館の特別展・企画展に  
 も感じられる。各館とも、いかに入館者を増や  
 すか苦勞しておられるようで、目玉さがしに苦  
 しんでいる。特別展などきれ目なく開催され、  
 学芸員はその会場準備と資料の借用などに追わ  
 れ、博物館本来の仕事の一つである地域の貴重  
 な資料を保存・研究する面が見落されがちにな  
 っているように思う。最近の展示は画一的で、  
 実にスマートであり、レイアウトも一流である。

しかし、博物館の持っているそれぞれの特徴  
 は失われ、デパートで開催される〇〇展のよう  
 ですらある。デパートなどで開催される展示品  
 はすべて借り物であり、展示は業者委託である。  
 展示会が終わったら何も残っていない。

博物館における展示は、これと同じであって  
 はならない。学芸員や関係者の息づかいが、展  
 示を通して伝わってこなければ意味がない。展

示を通じそれぞれの館に残る財産が出来てこな  
 ければ、たとえ人が多く入館しようと本物の展  
 示ではないと考えるのは、考えすぎだろうか。

その意味で、館員の手づくり展示が少なくな  
 ってきた現状を淋しく思う。ある博物館の特別  
 展は年一回である。予算もそれなりについてい  
 る。けれど展示を見ると、ほとんどが手づくり  
 である。理由を聞いてみると、調査研究と資料  
 収集に予算の多くを使うとのことであった。展  
 示を機会に、館として必要な資料を購入し収蔵  
 していくの方針で、解説やパネルは館員が手  
 づくりをし、なれない手で書いているのである。

展示解説書は、学芸員自身の手で研究した内  
 容が中心になっているため、手にした者は、そ  
 の博物館のあたたかさを感じる。

博物館における特別展は、長い間の調査研究  
 の成果を展示してこそ、はじめて成立するのだ  
 はないだろうか。調査研究の過程で新たな事実  
 が発見できる可能性がある。館員が足で集める  
 資料収集活動は、人とのつながりを生み、思い  
 がけない資料が寄贈されることすらある。もし  
 て何よりも、館員が、その「もの」に対して話  
 ができることであろう。その成果は研究紀要な  
 り専門誌に発表できる内容に高まっていく可能  
 性が大である。それが博物館の財産であり、や  
 がてその財産は人々に還元されていくはずであ  
 る。

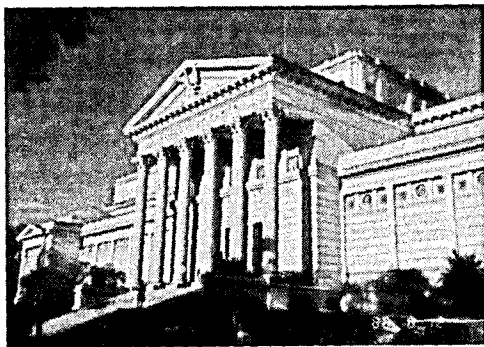
今一度、催し物を見直してほしい。本当に館  
 の発展につながっていくものなのか否か。客寄  
 せのためのパンダであってはならない。

(S.A)

# アルゼンチンの自然博物館寸見

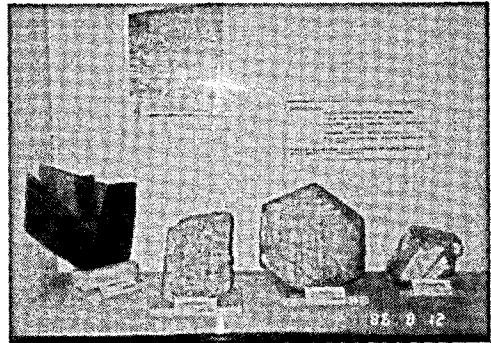
笠原芳雄

よく知られているように日本からみて地球の裏側（反対側）は南米大陸のアルゼンチン、首都はブエノスアイレスである。筆者は民間の外交使節団とでもいえるグループ（40名）の一員として、今夏この地で一週間を過ごしたのであるが、その間日程の合い間をぬって二つの博物館を訪ねることができた。それが目的ではなく、時間的制約の中での見学ではあったが南米（ラテンアメリカ）における博物館の現状の一端を紹介することが何かのご参考になればと思って筆をとった。なお、ブエノスアイレスの博物館についての資料を提供して下さいた日本博物館協会事務局にお礼を申しあげる。



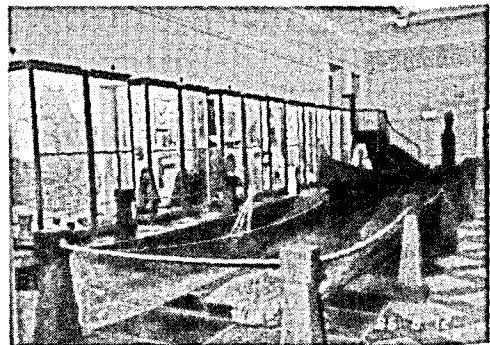
（ラ・プラタ博物館）

(1) ラ・プラタ博物館（アルゼンチン共和国ブエノスアイレス州ラプラタ市）：世界の代表的な自然史博物館の一つといわれているところなので機会があれば行ってみたいとかねてより思っていた。月曜日の午後幸い全体行動の予定がなくなったので一人ででかけた。ラプラタ市はブエノスアイレスの南東約60Kmにある小都市（州都）であるが、そこまでの経路をホテルの支配人菊地さん（東京出身）に聞くとブエノスの南方面へ行くターミナル駅からひんぱんに列車が出ているとのこと。乗ったのが各駅停車のディーゼル車なので1時間半ほどかかって終点ラプラタ駅へおり立った。田園の静かな町とい



（鉱物部門の展示）

った印象をもちながら、タクシーで5分ばかり走ると公園（森）の中にある博物館の玄関下へ到着。大学付属と資料に書いてあったので大学構内の一隅にある建物を想像してきたが、それは組織上だけのようで、まったく独立した立派なものであった。階段を上ると客を送って出たらしい白衣の職員がいたので名刺をみせて来意を告げると、地下一階の古生物関係の研究作業室へ案内してくれた。そこではプレパレーター（技術員）が哺乳動物化石の石膏型取りをしていた。ほどなく古脊椎動物学教授兼研究員のパスカル博士があらわれて「会議中なのでこの二人に案内させよう。展示資料のいくつかはケースが空いているがこれはいま東京の高島屋で開催している本館の特別展に出してある」といつて前にのべた技術員を案内につけてくれた。す



（考古部門の展示）

ぐに1階の古生物室から見学をはじめたが100年以上上っていることもあって室内は古ぼけた感じでケースも古めかしい。しかし中の化石やその復原骨格はどれもみごとなものばかり。なるほど空のケースがいくつかある。残りの中で最もめだつ標本はオオナマケモノの骨格復原であった。唯一のジオラマは手作りとおぼしい小型で、草原の水辺にすむ哺乳動物を示すものであった。次に隣室の岩石・鉱物室へ、ここでも展示標本はみごとなものばかりであったがキャプションなどは手作りでしかも解説文は3〜4行と簡潔そのもの。オニックス(めのう)やアーゲイト(縞めのう)などこの国特産の大型標本のすばらしさに、室やケースの古めかしさは気にならない。堆積続成作用や変成作用の説明も壁面展示ではあるが、工夫してあった。しかし文は最少限度。筆者は日本の多くの館の展示解説文は長すぎると思っているのだが、この考えを裏書きする状況であった。(註:解説が不要だということではない。詳しくは展示解説書にまわすべきで、長文の展示解説は一般観覧者に実物を見ようとする意欲すらそぐことになりかねないからである。誤解のないようお願いする。)一階を巡るともう時間の残りも少なく、大急ぎで2階の展示室へ。考古室は両面にぎっしり資料が並び、やや狭い感じであった。片側の人類コーナーでは頭骨の実物に模型を使った解説がみられ、隣りの昆虫室では小型の標本は拡大図を付してあった。もちろん標本ケース中に並ぶ実物が主体である。調査や研究の状況などについても聞きたかったが帰りの列車時刻が気になり、彼等にお礼もそこそと呼んでくれたタクシーにとびのった。なお、高島屋で公開されたラプラタ博の特別展は61年11月24日まで長島スパランドに展示してあった。

(2) アルゼンチン国立自然史博物館(ブエノスアイレス市アンヘルガジャルド通):翌日も午後が自由時間であったので、東京のそれより歴史の古いという地下鉄に乗って都心より西方のセンテナリオ(100年)公園へ出かけた。日



(アルゼンチン国立自然科学博物館)

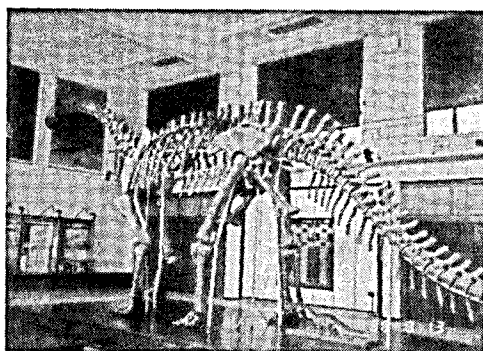
本とちがって次の停車駅名の表示がないので7つ目とわかっていても落ちつかない。アンヘル・ガジャルド駅で降り、5〜6分歩くとその裏側の公園との間に大きな建物がみえてきた。遠くから見ると入口を10数名の小学生(高学年)が入っていくところであった。火曜日の午後であるから授業なのだろう。受付で地質担当者をたずねると4階へ行けと警備員が壁(箱)のない時代的なエレベーターに乗せてくれた。ちょっとこわい感じ。2階で女子職員が乗り込んだのもう一度たずねると地質部の主任ルスタジェル博士の部屋まで案内してくれた。博士はいかにも人なつっこい態度で椅子をすすめ、先年京都や日光をまわってすばらしかったと話し出したので鶺鴒の絵入りタオルを渡したらますます喜んでロッカーからアルゼンチンの代表的鉱物ロードクロサイト(菱マンガン鉱:インカローズの名でみやげ品になっている)の大型標本(5Kg以上もあろうか)を出して持っていかないかというのでありがたく頂戴した。そしてこの館には渡辺がいるから会うとよいといって3



(鉱物展示室で見学する小学生)

階の古生物研究室へつれていってくれた。渡辺博士は二世で、北大へ留学した小型有孔虫化石専門の物静かな女性研究者であった。同室のプレパレーターも二世の松原嬢、大阪自然史博の千地元館長も訪ねてきたこと。北大の故湊教授のことなど日本語の話せる人なので話は尽きないが時間がないので次の機会にと部屋を出た。ルスタジュール博士の案内で1階の鉱物室から展示室をまわったが、ここはラプラタ博物館以上により一層標本室といった感じのケース展示で、名称・産地だけが付してあった。大型標本は裸展示である。次の古生物の室は大きくて広かった。ここでもディプロドクス（雷竜）などの大型恐竜の骨格復原をはじめスミロドン（剣歯虎）など哺乳動物化石がずらりと並び、スペースは多分1階の半分以上を占めていたと思う。ここでも特にコーナーの構成はないようであった。その隣りは南極室で南氷洋の水生动物や鳥などこの国の特徴を示す内容がみられた。2階は動物室で日本とはちがった鳥や哺乳動物のいろいろが印象に残った。ジオラマはやはり手作りで草原のダチョウとヌートリアなどの小型動物の二つ、微生物の拡大模型のほかはすべて実物がずらり。自然写真のコーナーは手作りそのものであった。前にのべた渡辺さんの話ではこの館には小中学生だけに解説するミュージアム・ティーチャー（コンパニオン）が10名ほどいるが一般の入館者に対しては案内しないということであった。そのためかどの室にも職員の様子はなかった。そうこうするうちに冬の日が沈むころになったので、急いで入口の売店で本館の歴史・解説書を買って博士にわかれを告げた。先年ヨーロッパの自然史系博物館をのぞいた時もそうであったが、それらにも劣らずこの館も標本室の連続といった感じで、各展示標本のすばらしさは日本の諸館と比較して圧倒的であった。それは経済的には中進国ではあっても1812年創立という輝かしい歴史と伝統のなせるところだと思われた。ただしこの国が経済的窮乏にあるということが職員の補充ができないという話や建物の整備や印刷物の面でもうかがうことが

できた。



（古生物部門 雷竜の骨格復原）

（付）まぼろしの南極博物館：日博協提供のリストの最初の一つは「南極博物館」とあり、その住所が筆者らのホテルから幅140mの「7月9日」通りをへだてた向う側の街であったので夕方の空き時間を利用してでかけた。めざす入口には「国立南極研究所」とあり博物館の表札はなかったが、住所はまちがいないので受付で地質担当を聞くと2階へどうぞとのこと。階段をのぼっても展示らしいものはなかった。ドアをノックすると研究員らしい男が出てきたので要件を云うと室内へ入れてから「展示は港の船でやっている」といい、壁の二枚の南極の写真を指して「ここの展示はこれだけだ」と笑いながら話してくれた。氷河と火山を研究しているという。すぐ奥に座っていた所長のリナルデイ博士が気の毒に思ったのか南極局のメダル（文鎮に用いる重いもの）を手渡してくれた。つまり博物館と称する建物はなかったわけで、研究所がその成果を船で公開しているということだった。

以上のように行く先々で親切に応待を受け、短時間ではあったが学ぶことの多い見学ができた。経済状態の悪い時期とはいえ、この国の各館で長年蓄積した自産の資料のかずかずがもつ重みをずっしり感じた次第である。

# 第34回 全国大会に参加して

昭和61年11月13～14日、九州福岡の都久志会館及び福岡県立美術館において、第34回全国博物館大会が開催された。当日は200名ほどの参加者があったが、内7割が各博物館の長的職員の方々であり、若い活気が無く、いささか寂しく感じられた。

今回の大会テーマ「我が国博物館の今迄の歩みと今後の展望」の中で、パネルディスカッション、各部会、全国博物館会議が行われた。パネルディスカッションにおいては、今までの大会同様の討議がなされ、進展なく思われた。また部会についても同様に思われたが、その主な討議内容の概略を紹介する。

今回の部会は、第一部会＝公立部会、第二部会＝私立部会、第三部会＝大規模博物館部会、第四部会＝中・小規模博物館部会とに区分された。

## 第一部会

- 博物館と大学の博物館課程との関連において、各博物館での実習生受け入れの実情について、学芸員の資質向上、特に資料の保存科学に対しての実習体制を整えるべきであること。また、新入の学芸員は学芸員有資格者であり、各館自体の事情に応じて、育てているのが実情であるということ。
- 市町村などの小規模博物館における運営について、それぞれのブロックごと、地域での協力体制を整えて、協同企画の希望があった。

## 第二部会

- 学芸員の資質向上（ほぼ同上）、また、学芸員は、学習のみからの物事の解決だけでなく、研究をすべきである。しかし、それを普及・啓蒙する力をも必要であるということ。
- 科学・美術・民族・歴史等の専門学芸員制度の確立提案。
- 税制の問題 博物館の増改築の折の一般募

金をする時、大蔵省に指定寄付申請をする  
が、容易に認められないという実情について。  
（収蔵庫を設ける時は、国庫補助の対象になっているのに対し、展示施設を設ける場合は、その対象外になっているという不満など）

- 入館者数の増大策 ・ 公的機関の利用  
・ 地元住民との関連事業など。

## 第三部会

第一・二部会とほぼ同討議

## 第四部会

- 社会教育の場である博物館等における教育は、「楽しみ」という事柄を重視するべきである。

## 〈決議〉

1. 学芸員資質の向上を計るために、制度の改善、及び職場教育の充実を図られたい。
  - (イ) 学芸員の上級制度の導入
  - (ロ) 研修制度の確立
  - (ハ) 保存科学知識の修得
2. 税制改革については、博物館運営の基盤確立のために税制を抜本的に改善されたい。
  - (イ) 公益法人に対する収益事業認定基準の大幅緩和
  - (ロ) 試験研究法人の認定基準の大幅緩和
  - (ハ) 指定寄付の適用を容易に認められるよう簡易化

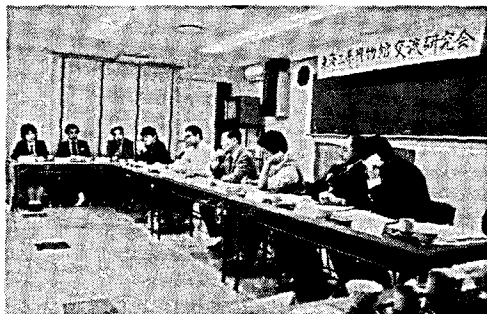


(K.S)

# 第11回 東海三県博物館交流研究会・報告

## 「各博物館におけるPR活動について」

昭和61年10月20日(月)・21日(火)の両日にわたって、東海三県博物館交流研究会が、三重県菟野町社会福祉センター・御在所日本カモシカセンター・菟野町郷土資料館で行われました。



「各博物館におけるPR活動について」とのテーマで話し合いがもたれた研究会では、参加各館(愛知=19館, 22名。三重=11館, 18名。岐阜=10館, 10名)の現況報告の後、①記者発表について、②テレホンカードについて、③その他のPRについて、様々な報告と意見交換がなされました。

さらに、三重県博物館協会会長・中村幸昭鳥羽水族館々長より“マスコミの裏表: 対応のノウハウ”と題すべき、貴重なお話を伺うことができました。中村氏のかつての新聞記者としての体験から、日本作家クラブ常任理事・日本観光学会評議員等11もの肩書きを持たれる豊かな学識・ユニークで自由な発想からのお話は、目からウロコが落ちる思いで聴かせていただきました。



(御在所岳山頂より奈良方面を望む)



(日本カモシカセンター見学)

夜の研修と懇親会は、会場を御在所山上ホテルに移し、夜の更けるまで、親しく楽しく続けられました。ここでも中村会長を先頭に、三重県博協会の皆様の精力的な活動・サービス精神に、博物館のPRの実際を示されたように感じました。

翌21日も快晴に恵まれ、日本カモシカセンターの見学、菟野町郷土資料館の見学・研修という極めて密度の濃い、意義深い2日間でした。

昨年の岐阜、そして今回と続けて参加をして感じたことは、こうした有意義な会にもっと多くの人が参加して交流を深め、博物館人として仲間づくりをしたいということ。時間的制約はあるにしろ、実務的・実務的な技術研修をも企画してほしいということです。

日進月歩の産業社会のなかで、取り残されず、なおかつ流されることなく、博物館の“ゆくえ”を見定め、発展させていけるだけの見識と技能技術を持ちあわせたいと感じました。三重県博物館協会の皆様、ありがとうございました。(MI)



(菟野町郷土資料館の見学・研修)

## 館・園紹介 No. 65

高山短期大学・飛驒自然博物館

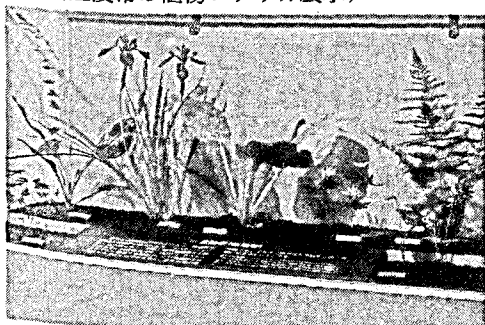
〒506 高山市下林町1155番地

TEL 0577-32-4440 (代)

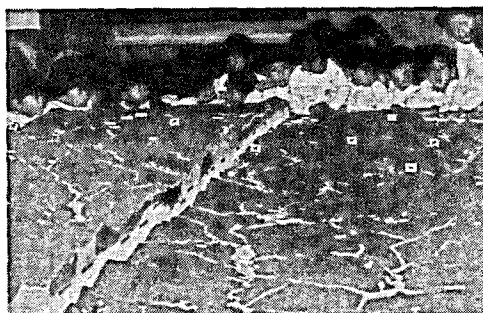
学校法人高山短期大学では、大学図書館の新築に際し、地域社会の学術・文化の向上に貢献できることを願い、また地域社会に密着した開かれた大学づくりの一環として、図書館に併設で飛驒自然博物館を建設、去る10月16日に開館されました。遊歩道の設けられた自然豊かなキャンパス内に、鉄筋コンクリート三階建・レンガ作りの建物はしっかりと落ち着きがあり、高山市の景観デザイン優秀賞に輝いたもので、1階が博物館と喫茶室、2～3階が図書館となっています。

展示室は約300㎡、ミズバショウをシンボル導入展示とし、自然と生活、飛驒の地形、飛驒地方の生い立ち、鉱産資源、四季の移り変わり、と生物、標高と生物、無脊椎動物、日本列島と飛驒、自然を知り守る（ビデオコーナー）等の内容が展示されています。動植物の分布域、火山・温泉の所在地等が点滅し、断面がせり上る一大地形模型、カモシカの住む亜高山、冬のライチョウの生態を示す高山帯のジオラマ等が目をはきまします。展示見学をふりかえるパソコンによる「Q&A」の自己評価、遊びのコーナーが設けられているなど、こじんまりとまとまった楽しい館内となっています。

動植物・地学を総合した自然史系博物館が数  
(丘陵帯の植物レプリカ展示)



(飛驒地方の生い立ちのコーナー)



(飛驒の地形模型に見入る園児たち)

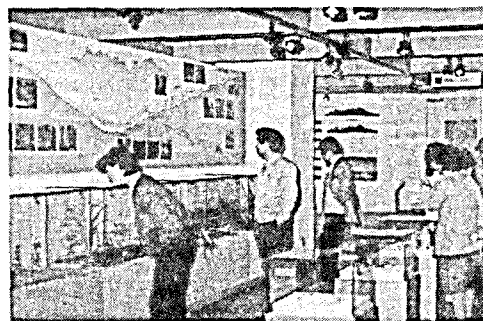
少ない日本の現況の中で、注目される貴重な博物館といえます。飛驒地方を中心とした郷土図書資料の収集にも努力されるとかで、博物館と図書館が同居していることは、利用者側にとっても都合がいいことです。この知的生産空間が両館とも無料で開放されていることも、うれしい限りです。立ち遅れている郷土の自然史科学の研究活動にも力を注がれ、その成果を展示や自然教育事業に生かされるなど、今後の博物館活動に、大きな期待が寄せられています。

開館時間；9.00～16.00 (平日)

9.00～13.00 (土)

休館日；日曜日、祝祭日及び大学の定める休日。

(標高と生物コーナー)



新入会・館園紹介

○ 日本土鈴館

岐阜県郡上郡白鳥町大鳥 国道156号線沿  
TEL (05758) 2-5090  
館長 遠山一男  
北海道から沖縄まで、全国各地の土鈴一万点を収集展示されています。

○ 博石館

岐阜県恵那郡蛭川村田原  
TEL (057345) 2110 (代)  
館長 岩本哲臣  
前号でも紹介しましたが、高さ13m重量36トンの御影石のオベリスク、エジプト・ケオプス王の10分の1のピラミッドをはじめ石のオブジェが多数あり。本館には、蛭川地区産出の鉱物を中心に、世界中の珍しい鉱物が展示されています。  
協会館園として今後の発展を期待します。

くすり博物館・新館オープン

かねてより新館建設を進めていた内藤記念くすり博物館が内装・展示準備も終了し開館しました。博物館への入口は、エーザイ川島工園正門から東700mのところにあります。

高山短期大学・飛驒自然博物館オープン

飛驒の自然を紹介する県内でも唯一の自然だけの博物館が開館しました。専門のスタッフを配置し、調査・研究もするとのこと、これから期待できそうです。内容については新館紹介で……………。

第6回 協会会員研修会 - 予告 -

本年度最後の会員研修会を「博物館における写真技術」の内容で予定しています。期日は3月の予定ですが現在講師と折衝中です。  
後日、会員に案内いたしますので、多数の参加を希望します。

催し物案内

◎ 岐阜市歴史博物館

企画展 美濃の和紙  
1月24日(土) ▶ 4月5日(日)

◎ 岐阜県美術館

土と炎展  
今日の造形—新たな展開と可能性  
1月6日(火) ▶ 2月11日(休)

◎ 岐阜県博物館

資料紹介展 岐阜県のシダ植物  
2月24日(火) ▶ 4月5日(日)

博物館総合保険のご案内

昭和60年に(財)日本博物館協会が契約者となって発足した、博物館のための保険制度があります。来館者の万一の事故に備えてご検討されてはいかがでしょうか。

詳しくは、日博協か、第一成和事務所まで  
TEL 03-591-7190 TEL 03-667-9038

編集後記

◎あけましておめでとうございます。仕事の遅い編集担当は、冬の休みに入って、あわてて原稿整理をしています。博物館人登場は、今回カットさせていただきましたが次号は載せる予定です。(S.A)

◎新入会館園、新規オープンした館、すべて載せたいのですが、紙面の都合上順序は編集局に一任ください。(S.A)

◎今年は無年、飛躍できる年でありたいと願っています。けれど博物館をとりまく現状は厳しいようです。その厳しさをはねのけて、魅力ある館園をめざしがんばりましょう。(S.A)

◎協会の大会や研修会など、秋にはいろいろ出席しましたが、岐阜県からの参加者は少なく淋しいかぎりでした。多忙だと思いますが、参加し発言することから魅力ある会になるものです。研修会でも同じです。自分たちの手でよくしていきたいものです。(M.I)